平成23年度　前橋・高崎連携事業　**東国千年の都**

第1部

いい顔してるね。
―出土品にみる顔の世界―

前橋・高崎連携事業文化財展の開催にあたって

前橋・高崎両市は、群馬県の中央部に位置し、遥か昔から個性豊かな文化を育んでまいりました。それを反映して、両市には多くの史跡をはじめ、さまざまな文化財が残されています。

本文化財展は、前橋・高崎両市の豊かな歴史的・文化的資産の有効活用を図るとともに、それぞれの地域の特色を市民の皆様に知っていただく絶好の機会として、平成19年度から共同開催されており、今年で5年目を迎えました。

今年の展示会は、2部構成となっており、第1部では、『いい顔してるね。―出土品にみる顔の世界―』と題し、子孫繁栄を祈る顔(土偶)や王の墓を邪悪なものから守る顔(埴輪)、国の安寧を託された顔(仏像)など、さまざまな「顔」が表現されている出土品を紹介します。

第2部では『古代の寺・役所、探しています』と題し、前橋市の山王廃寺跡(さんのうはいじあと)の調査や、高崎市で実施予定の多胡郡衙(たこぐんが)(役所)の確認調査など、両市におけるプロジェクトを紹介します。

両市の個性豊かな文化を、ご来場の皆様に体感いただくとともに、前橋・高崎両市が、今後とも手をたずさえて歩む一助となれば、本事業開催の趣旨にかなうものと思います。

どうぞ、ごゆっくりとご観覧ください。

前橋市長　高木政夫
高崎市長　富岡賢治

第2部

古代の寺・役所探しています

主催：前橋市・前橋市教育委員会、高崎市・高崎市教育委員会
後援：上毛新聞社、朝日新聞前橋総局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、NHK前橋放送局、群馬テレビ、エフエム群馬、ラジオ高崎、まえばしCITYエフエム

問い合わせ先：前橋市教育委員会文化財保護課　〒371-0018 前橋市三俣町 2-10-2　TEL 027-231-9531　FAX 027-231-9862
高崎市教育委員会文化財保護課　〒370-8501 高崎市高松町 35-1　TEL 027-321-1292　FAX 027-328-2295

第1部 いい顔してるね。— 出土品にみる顔の世界 —

Ⅰ 豊穣を祈る — 縄文・弥生時代

■縄文時代の顔

縄文時代の「顔」と言えば、多くの人が土偶を思い浮かべるであろう。写実的・立体的な造形が強い印象として残り、とても数千年前の作とは思われないものもある。

関東地方では、土偶は早期（約9000～8000年前）には登場するようである。前橋市・高崎市で最古の土偶は元総社蒼海遺跡群から出土した前期（約5000年前）のものであり、極めて抽象的な造作である。それに対して後期（約3000年前）の土偶は、横俵Ⅱ遺跡に観られるように写実的となる。発達した乳房や妊娠をしているかのように腹部が盛り上がった様子などがうかがわれる表現が多いことから、女性を模していると考えられている。

土偶（元総社蒼海遺跡群）

さて、縄文土器と比べ見つかることがまれな土偶は、どのような目的で作られ使用されたのであろうか。出土する土偶の大半はわざと打ち欠かれているかのように破損していることから、疫病・骨折等の治癒を願い身代わりとする考えがある。また、女性を模した土偶の破片を大地に撒くことで豊穣や多産を祈るという考えなども知られている。いずれにしろ、土偶は祭具としての役割を担っていたようである。

ところで、土偶以外にも顔の表現が付された人面装飾の土器が存在する。中期（約4500年前）から登場するようであるが、土偶と同様にその出土量は極めて少ない。前橋・高崎では、堀越西一丁田遺跡の人面装飾付の深鉢（後期：約3500年前）が知られている。

土偶や人面が付された土器は、縄文人の日常生活での豊穣という祈りが込められて作られたのであろうか。単純に語る事はできないが、土偶や人面装飾付の深鉢は縄文人の心や世界観を垣間見ることができる資料である。

土偶（横俵Ⅱ遺跡）

土偶（横俵Ⅱ遺跡）

人面装飾付土器（堀越西一丁田遺跡）

■弥生時代の顔

弥生時代の土偶（人形土器）は高崎市小八木志志貝戸遺跡出土のように、どこかユーモラスで私たちをほのぼのとした気持ちにさせる。しかしながら、この土器は弥生時代の墓域から出土したものである。中空を見据えた眼、どんな匂いでも嗅ぎ分けるような大きな鼻、些細な音も聞き漏らさないかのような大きな耳、また顔面は赤色に塗られ、凡そ人とは思われない異形の様相である。墓域からの出土と異様な顔つきから、この人形土器には悪霊から死者を護るという思想が感じ取れる。

人面付土器（小八木志志貝戸遺跡）

■縄文／弥生の表現の違い

縄文時代は女性が、弥生時代は男性が土偶や人形土器として表現される。狩猟採集文化と農耕稲作文化から生じる精神世界（世界観）や社会性の差異であろうか。また、縄文時代の土偶は貝塚や住居等から多く出土するのに対して、弥生時代の人形土器は墓坑からの出土例が多いことが指摘され、使用目的も大きく異なる。土偶や人形土器はともに人物的な表現であっても、その意味するところは大きく離れている。

Ⅱ 王の墓を護る― 古墳時代

古墳は、3世紀後半～7世紀にかけてつくられた権力者の墓で、その数全国で16万基に及ぶ。神聖な墓を飾りたてる道具として発展したものに「埴輪」があり、死者の眠る場所や権力者の財力を示し、さらに、当時行われたさまざまな儀式の様子を表現した。人物をかたどった埴輪は5世紀中ごろに出現し、王や巫女などの造形がつくられた。そこには、多様の意味や役割がこめられている。

ここで紹介する盾持人埴輪は、古墳（墓）の一番外側に設置されることが多く、体の前で構える盾と顔を、墓の外へ向けて置かれた。その造形を細かく見ると、大きく見開いた目・高い鼻や、ゆがんだ口、はたまた、小石で歯を表現したものまである。このような異様さを強調する造形には、死者が眠る神聖な場所に、邪霊が入り込むのを見張り、墓を護る役割を託されたようだ。

盾持人埴輪　中二子古墳（前橋市）
前方後円墳を二重の堀が囲む。盾持人埴輪は、内堀と外堀に挟まれた中堤上に並べられた円筒埴輪のなかに設置された。顔と盾を外側に向け、古墳に魔物が入り込むのを防いでいる。

盾持人埴輪　保渡田八幡塚古墳（高崎市）
盾のデザインや頭の被り物の造形が異なる。色々な邪霊に対応するため、もしくは、王の警護にあたった兵士の出身地毎に違うという学説がある。

■ 顔を飾る―彩色・入れ墨

埴輪の顔に、赤・黒や白色に塗られることがある。赤い色は「ベンガラ＝酸化鉄：鉄さび」の粉末を溶いたもので、儀式の際のメイクを表現している。

人物埴輪のなかに、入墨を思わせるものがある。「黥面埴輪」と呼ばれ、古墳時代の近畿地方で出現した。鼻のまわりや輪郭を隈取る表現などがあり、力士や盾持ち人など、芸能や僻邪の役割を持った職掌に限られる。

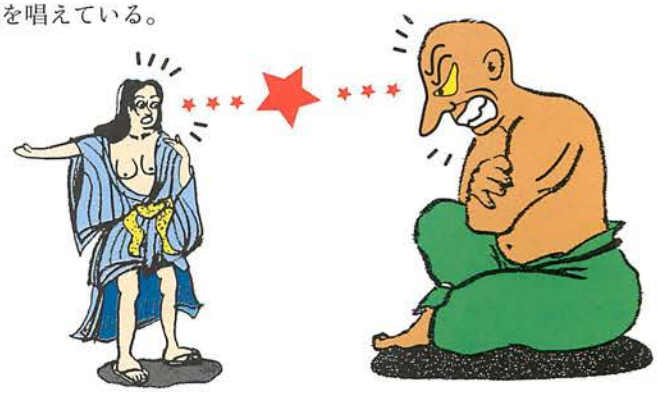
黥面埴輪　辰巳和弘『埴輪と絵画の考古学』(1992) より抜粋

■ サルタヒコ　vs　アメノウズメ―目の霊力

サルタヒコ（猿田彦）は日本神話に登場する神で、「天孫降臨」の件に登場する。アマテラスの命令で、ニニギノミコトが「葦原の中つ国（日本）」へ天降る際、天界の分かれ目に、ホオズキのように赤々とした目をもった怪しい神があらわれた。アマテラスは、「力は弱いが、気後れしない」

アメノウズメに、その正体を確かめるよう命じた。
アメノウズメは、胸乳をあらわにし、裳の紐を股に押し込み立ちはだかった。相手の眼力を削ぐ作戦だ。目のやり場に困ったサルタヒコは、道案内するための国ツ神であることを白状したという。

辰巳和弘さんは、古代人は「目には、異類と対決し、これにうち勝つ呪力がある。」との思想をもっていたとする学説を唱えている。



Ⅲ 国家の安寧を託す ― 飛鳥・奈良・平安時代

大型の墳墓に権力の象徴を求めた古墳時代の社会は、やがて律や令という法規を基盤にした律令国家の社会へと変質していく。地方に割拠した地域首長の連合社会から中央集権社会へと変貌を遂げるのである。日本列島は国郡里に整備され、各国への国衙・国庁の設置や国司の派遣、戸籍の整備、公地公民制の施行などが行われ、やがて健児制という軍事制度によって地域支配が完成して国土の統一が図られる。

精神的なよりどころは仏教に委ねられ、各国には国分寺が建立され、有力氏族によって建立された私寺は定額寺として認定されて、盤石なる仏教世界が展開する。群馬県では「上野国」の精神的な支柱として上野国分僧寺や尼寺が出現し、放光寺をはじめとする数寺が定額寺として認定された。この放光寺が山王廃寺である。ここは中央の仏教思想を先進的に取り入れた荘厳な伽藍が形成され、五重塔の中には釈迦の仏伝の一つのシーンを再現させた塔本塑像群が安置されていた。

塑像頭部 神将像（山王廃寺）

塑像は粘土を使って仏像を塑形する技法で奈良時代に流行した。多くは木心に藁縄などを巻きつけ、粒子の粗い土から、細かい土へと順次盛り上げていき細部を造形した。

山王廃寺で発見された塔本塑像は、舎利をまつる塔を飾り、仏教思想を解説して、これを拝する人たちを信仰に導くためのものである。

鬼瓦（黒熊中西遺跡）

次に祭祀では勾玉・丸玉・鏡形など石製模造品を使用する古墳時代の伝統につながる祭祀と並んで、いわゆる律令的祭祀が登場する。奈良時代の都では、政争や自然災害、天候不順、飢饉、疫病などを背景にして社会不安が高まり、様々な祭祀が行われた。その証に、雨乞いの殺馬儀礼の形代としての馬形、災厄祓いや呪詛に使用した可能性がある人形、各種のまじないに用いた木簡、人面を描いた土器（人面墨書土器）など律令的祭祀の遺物が多量に出土している。最大の祭祀は国家が行う大祓であり、祭祀遺物の出土により、それを挙行した祓所を特定することができる。都で始まった律令的祭祀は、国司など中央集権的行政組織を通じて地方へ波及し、やがて国家祭祀から個人祭祀へとその内容を変化・拡大させ、都で衰えた後も地方で独自の展開を遂げる。そこには、神霊祭祀と並んで悪霊排除の祭祀や吉凶禍福を占う種類の祭祀などもあり、道教や陰陽道などの思想の反映もみられる。そして、やがて民間宗教として地に根付いていく。

人形（元総社明神遺跡）

上野国府域を流れる牛池川から、人形と呼ばれる呪符が出土することがある。生きるための祈りか、それとも身代わりの形代か？当時の人々の心境までも伝わってくる。

Ⅳ 日々の暮らしをおくる ― 江戸時代

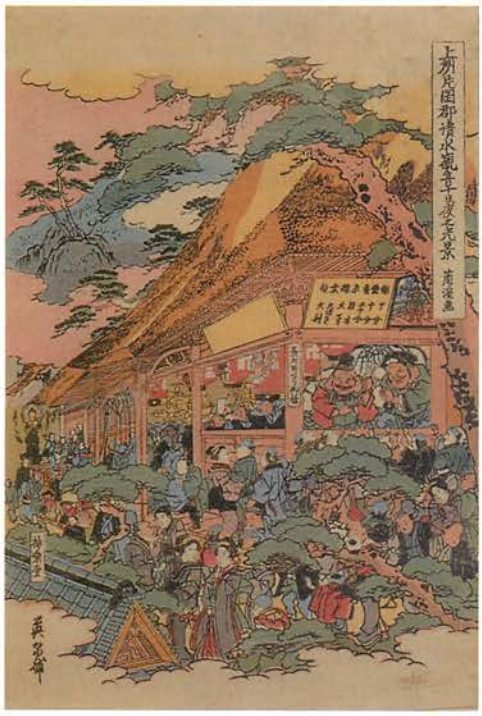
江戸時代は、徳川将軍家による統治が行われた265年間で、前橋には前橋藩（厩橋藩）、高崎には（高崎藩・吉井藩）がおかれた。この時代になると貨幣経済が発達し、町人の財力が強化を背景に、元禄文化や化政文化など町人による文化が栄えた。

また、印刷・出版技術の発展により多くの本が出版され、既成の画派に属さない「町絵師」が登場し、当時の豊かな暮らしぶりや、いきいきと生きた近世人たちが表現された。これらは、当時の生活や習俗を知ることのできる貴重な資料といえる。

＊元禄文化：江戸前期（17世紀末～18世紀初）に上方（関西地方）を中心におきた。
＊化政文化：江戸後期（19世紀前半）、江戸を中心におきた。

■ 浮世絵

「上州片岡郡清水観音十日ン夜之光景」青木周渓
（高崎市市史編纂室 所蔵）



「十日ン夜」とは、旧暦の10月10日（新暦の11月9～10日）にかけて行われる収穫祭。田の神が山へ帰る日である。恵比寿・大国の踊りや、にぎわう参拝客の表情が、活気を伝えてくれる。

■ 武士の姿が刻まれた硯

硯をみると、陸から海にかけて磨耗し、使用に耐えなくなったため、廃棄されたのだろう。裏面には、刀を脇に差し、髷を結う男と、馬に乗る男が描かれる。戦国期の人物画として貴重である。

石硯（箕輪城跡）

武士の姿

■ 願いを託す顔ー土人形

江戸時代に型づくりや手びねりで作られた、土製の焼物。江戸（現在の東京）では、17世紀中ごろに出現する。人形には、子どもたちの玩具として利用と、造形にこめられた願いがある。そこには、子ども達の健やかな成長を願う、親心が垣間見られる

猩猩　天神　西行　犬形土製品

○土笛・・・虫封じ。食べ物の喉詰まりを防ぐ。
○蹴鞠・猩猩・・・疱瘡除け。
○天神・・・学問、習字の上達。
○西行・・・泥棒よけ、脚気・腰痛のまじない。
○犬・・・子どもの守り神。

■ 屋根のうえから城を護る―鬼瓦と鯱瓦

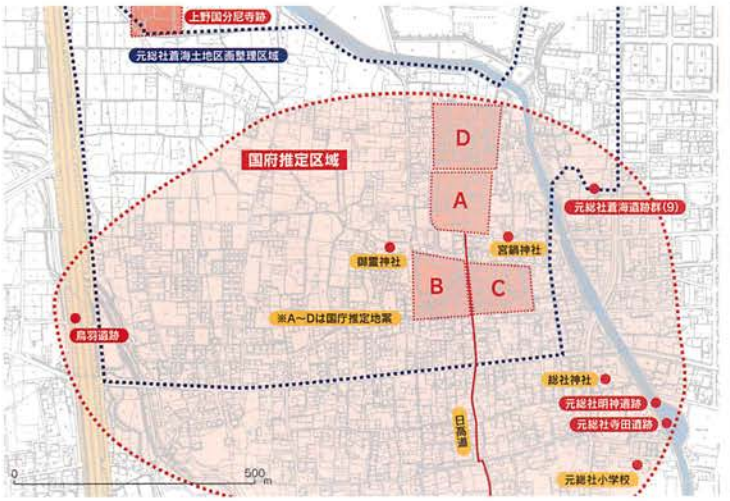
屋根の端につけられた鬼をかたどる瓦。奈良時代以降に「鬼面」が採用された。邪悪なものを打ち破る、あるいは、魔除けの意味がある。江戸時代には、家紋や水（防災目的）などのデザインもあった。姿は魚、頭は虎という想像上の動物が鯱で、鬼瓦と同じく、建物を護る役割がある。火災の際には、水を噴き出して火を消すといわれる。

鬼瓦（左）と鯱瓦（右）（高崎城三の丸遺跡）

第2部 古代の寺・役所探しています。

7世紀後半、群馬県で総社の地に宝塔山古墳、蛇穴山古墳などの大型方墳が造られる頃、日本は律令という諸法律を定め、天皇の基、国家としての体制を整えていく。その中で、日本を大きく畿内と7つの道に分け、それぞれに国を置き、その下に郡、里（郷）をおいた。そこには、国衙・郡衙という役所が置かれた。当時、上野国と呼ばれた群馬県は、東山道に属し、前橋市元総社町周辺に国の役所（国衙・国庁）が置かれたと考えられている。現在、前橋市では、区画整理事業に伴って国庁を探すための発掘調査を行っている。これまでの調査の積み重ねから、この地域からは国庁に関連する様々な重要な出土品や遺構が発見検出されているが、残念ながら、まだ、核心には至らない。今後の調査に期待したい。

一方、国の下に置かれた郡については、前橋市域では、古代の勢多郡（勢多郡衙）と推定される上西原遺跡が、前橋市荒子町で調査されている。高崎市域では、国特別史跡である多胡碑に記されている多胡郡の郡衙を探すための発掘調査が始まる。

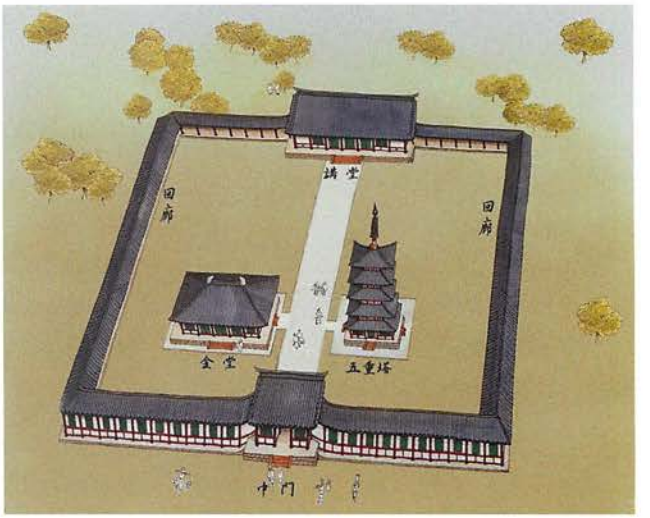


国府4案

墨書土器（元総社寺田Ⅲ遺跡）
「国厨」「曹司」などの施設名が書かれている。

7世紀、畿内の豪族によって始められた氏寺の建立は、地方の豪族にも広がり、上野国内では、前橋市山王廃寺、伊勢崎市上植木廃寺などが造られる。8世紀になると、仏教は国教として保護され、奈良に総国分寺として東大寺が、各国には金光明護国寺として国分寺と国分尼寺が造られ、地方の民衆にも広く仏教は浸透していくことになる。その結果、瓦が葺かれた小さな寺や仏堂が集落に営まれ、本物の塔の替わりとして、焼き物で造られた塔（瓦塔）が安置された。瓦の散布地や瓦塔の散布地はこういった場合が多いのであろう。

一方、9世紀以降になると、最澄、空海によって中国から新たな仏教、密教が招来される。この新仏教は、世俗を離れ、深山幽谷の地に修行の場を求め、新たに寺を建てる。前橋市の赤城山南麓の中腹にある宇通遺跡や白草廃寺はその好例であり、高崎市の黒熊中西遺跡もこれに当たる。



山王廃寺伽藍想像図

古代の寺や役所の調査例は極めて少なく稀である。それは、古代の寺については、絶対数が少ないということであり、開発が少なく調査の手が入らない山中にある遺跡が多いということも理由にあげられよう。また、古代の役所については、その後も集落地として利用され続け、現在では家屋の密集地として、まったくその痕跡が失われてしまっているのであろう。今後の継続的で丹念かつ、綿密な調査が行われることが望まれる。

■古代多胡郡の役所跡を探す

高崎市吉井町にある国の特別史跡多胡碑は、和銅4年（711）の多胡郡建郡を記念して建てられた。
多胡碑は、多胡郡の役所（郡衙）の周辺に建てられたと考えられている。これには、多胡碑の周辺に、「御門」・「大宮」といった小字があること、郡衙の近くに造られることが多い寺院があったと考えられることなどが根拠となっている。

高崎市では、多胡碑の史跡としての価値をさらに高めるため、以前から碑の周辺に推定されている古代多胡郡の郡衙とその関連遺跡の場所を探していく計画である。

古代役所のイメージ

多胡碑

■郡衙ってなあに？

現在の日本が都道府県・市町村に分かれ、それぞれに役所があるように、古代の日本も律令制の下で国・郡・里に分けられ、国の役所と郡の役所があった。国の役所は現在の県庁、郡の役所は高崎市役所などにあたる。こうした郡におかれた役所を郡衙と呼んでいる。郡衙では郡内を治めるため、律令に従って郡内に住む人々の名簿を作り、これに従い税を集めて管理したり、公共事業のために人々を召集するなどの仕事をおこなっていた。

『上野国交替実録帳』という古文書をみると、郡衙は「正倉」「郡庁」「館」「厨家」と呼ばれる施設で構成されていたことがわかる。

「正倉」は税として納められた稲を収納する倉のことである。

「郡庁」は郡司（郡を治める地方官）が政務をおこない、時には儀式や饗宴などがおこなわれた郡衙の中枢施設のことである。

「館」は国内を巡行する国司や役人のための宿泊施設で、郡司の宿舎としての機能もあった。

「厨家」は館の利用者や郡司らに給食をおこなう施設で、調理場や井戸などがあった。

当時の集落では竪穴住居が一般的であったのに対して、郡衙は大型の掘立柱建物や倉庫が整然と建ち並ぶものであった。さらに、郡庁などの中心的な施設は溝や堀によって区画されていることもあり、当時の人々にとって大変立派なものにみえたことであろう。

多胡碑周辺の古墳と古代の集落遺跡

展示品が出土した遺跡の場所　高崎／前橋

takasaki

展示品が出土した遺跡の場所／高崎地域

13　弁天原遺跡
14　富岡・稲荷山遺跡
15　箕郷城跡
16　保渡田八幡塚古墳
17　上里見諏訪山古墳
18　剣崎稲荷塚古墳
19　日高遺跡
20　高崎情報団地遺跡
21　柴崎蟹沢古墳
22　上中居遺跡群
23　高崎城遺跡
24　下佐野遺跡
25　石原坊主山古墳
26　大道南古墳群
27　山名古墳群
28　黒熊中西遺跡
29　中原古墳群

maebashi

展示品が出土した遺跡の場所／前橋地域

1　山王廃寺跡
2　元総社蒼海遺跡跡
　元総社明神遺跡
　元総社寺田遺跡
3　旭久保 C 遺跡
4　西新井遺跡
5　前橋天神山古墳
6　堀越西一丁田遺跡
7　天神遺跡
8　柳久保遺跡
9　上西原遺跡
10　横俵Ⅱ遺跡
11　中二子古墳
　内堀 M-1 号墳
　内堀 M-4 号墳
12　宇通遺跡

高崎会場：入館無料

主催：高崎市・高崎市教育委員会

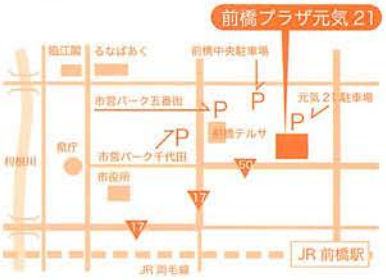
2012年1月21日（土）～1月30日（月）　午前9時～午後6時
高崎シティギャラリー 2F 第6展示室　高崎市高松町 35-1
問い合わせ：TEL.027-321-1292　高崎市文化財保護課

●JR 高崎駅から徒歩 7 分。
●城址地下駐車場
・城址第二地下駐車場
をご利用ください。（有料）

前橋会場：入館無料

主催：前橋市・前橋市教育委員会

2012年1月7日（土）～1月16日（月）　午前9時～午後6時
前橋プラザ元気 21 1F にぎわいホール　前橋市本町 2-12-1
問い合わせ：TEL.027-231-9531 前橋市文化財保護課



●JR 前橋駅から徒歩 15 分。
●市営交流プラザ等駐車場
（元気 21 専用駐車場）
・市営パーク 5 番街
・市営パーク千代田
・市営パーク城東
・前橋中央駐車場をご利用ください。
（2 時間まで無料）